

ナマステ

特定非営利活動法人

自然文化誌研究会 会報誌



130 号

2017 年 12 月 10 日発行号

いよいよトイレ棟づくりがスタート！！

昨年の 11 月 3 日に集合して、キャンプ場のログハウス第 3 弾「トイレ棟づくり」がスタートしましたが、その前に 2 棟目のログハウスの 1 階部分に床と壁を入れるということになり、月に 2 週のペースで大工仕事を続けてきました。1 年の時を経てようやく完成しました！！



9 月の INCH ライブでも舞台に！



1 階部分は丸太も加工できることをイメージした空間だったが、壁板・床板・庇を取り付けた。壁板はキャンプ場に生えていた杉を伐採して製材したもの。橋立地区の神社を借りて乾燥させている時に、熊の足跡がついた。床板は、木下善晴さんが「この床の上で生まれ育った」という、120 年前の材。部屋の内部には囲炉裏も設置した。

12 月より、トイレ棟に取り掛かっています。

■ 活動報告 ■

その 1 「タイ環境学習キャンプ」 報告

8.12~21

永井咲さん

今回私にとっては 4 回目の研修参加となりました。今回も普通の旅行では味わえないような刺激的な体験をたくさんできました。

私は 3 日間、特別に他の参加者の皆さんと別行動でパンダと現地の学校に通いました。前々回、前回も同じように学校と一緒に勉強したのですが、その時はコミュニケーションができるほど英語が堪能でなかったため、身振り手振りやイラスト入りのタイ語指さし会話帳で乗り切ったことを覚えています。

彼女はバンライ市から 1 時間ほど車でかかるウタイターニー市の学校に通っているため、朝 5 時半起きで準備をしなくてはならず毎朝大変でした…。その分、朝ごはんを食べる朝市では朝から活気のある様子や実際にお坊さんが托鉢をしている所を見られました。

タイの学校は中高一貫で、特にパンダの学校では英語や中国語、歴史や体育、工業といったように様々なコースに分かれるそうです。彼女は私とは真逆の理数コースを取っていたため、日々の授業は数学と生物、地学ばかりでした…。一つ下の学年の授業でしたが、少なくとも地学は私が今習っているよりも遙かに難しそうでした。プログラミングの授業もありました。

唯一私の理解できそうだった週に 1 回の英語の授業はなんと先生が多忙なためキャンセル！？とのことで、私はそのタイミングで学年主任のような人に挨拶に行きました。

タイの学校は本当に自由で、直前に授業が入ったり無くなったりすることは当たり前、私の挨拶に行った職員室も授業中のはずなのに多くの学生が遊んだり勉強したりしていました。

今回は私服で通っていた前回までとは趣向を変えて、服装も 3 日間工夫してみました。1 日目は私の高校の制服を着たのですが、皆の制服は私の高校の制服をそのままタイに輸出したので

はないのか？と思うほどそっくり(タイの学校の学生服は全国統一のデザインらしいです)だったのでほとんどの人にパンダの制服を借りたのかと思われてしまいました…。

2 日目は黒の浴衣にしたところ、担任に全校の前で挨拶をしろと言われ、2400 人の前で「サワディーカー」と言うはめに…。その結果全校に存在が知れ渡ってしまったため所構わず写真撮影大会が始まってしまいました！小さな中 1 の女の子たちから軍服姿の先輩、はたまた先生方まで！ご飯中や移動中も写真や手を振ることを求められるのでつかの間アイドルになった気分を味わえました。

3 日目は体育(といっても名ばかりでバスケのドリブルをひたすらやるだけでした)があったので折角だからと体育着を購入したのですが、ある先輩からコスプレをするように頼まれ残りの半日はメイド服姿で過ごす羽目になってしまいました。もちろん、浴衣姿より多く写真撮影を求められたことは言うまでもありません…。

最後に、お世話になったクラスの皆に折り紙のリボンや手紙を配った所、大変喜んでもらえました。逆にたくさんのお土産をもらえて、特に私の浴衣姿のイラストをもらったのが嬉しかったです(≥▽≤)

まだまだ体験したことは書き切れないのですが長くなってしまうのでやめておきます。今回は、英語がお互いある程度使えたことで意思疎通が容易になり、前回までより積極的に学校生活を楽しめたと思います。1 度この緩さに慣れてしまうと日本の学校が窮屈に感じてしまいますが、これもまた文化の違いということで勉強になりました。毎回私の学校に通いたいというわがママを叶えてくださる先生方、ボタンさん、パンダ、そして 3 日間 1 人にさせてしまったお姉ちゃん！ごめんなさい、そしてありがとうございました。



「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑧

今年の夏も約 10 日間タイに行ってきた。去年に引き続き、ロブリーのシリワット先生のところで、約 30 名の小中学校の先生対象に環境学習のワークショップを行った。パンダキャンプでもワークショップを行う。こちらは午前中、小中学生 30 名、午後は近隣の大人対象である(30 名)。ワークショップも役割を変化させてきたように思う。はじめは日本からのテクノロジーの紹介。そろそろ形を変えなければと思う。タイの地元で地元の身近なフィールドを使い、地元で入手でき

る材料を使って簡単な環境測定を行ったり、自分たちのライフスタイルを考えるものをしていきたい。運営委員会等で話し合っていきたいが、アイデアを持っていたら是非事務局まで連絡してほしい。とにかく来年も続きそうである。

今回は、ラジャバトプラナコーン大学とパンダキャンプとのなんとなくごちゃごちゃした人間関係がわかる若林さんの文章があったので紹介する。
(中込 卓男)

「タイの鳥 1 より」 『自然教室』 若林卓司 日記より

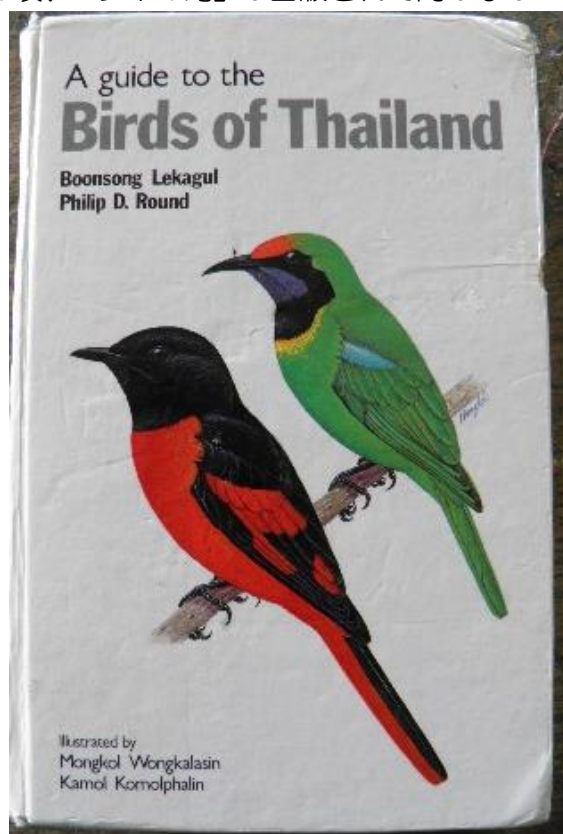
私がプラナコーン教育大学（今はプラナコーンインスティテュート）で本格的に教え始めたのは 1993 年からだったと思う。その時、一緒に日本語を教えていたブンティワ先生のとりなしで、理学部の先生を知るようになった。私もあいている時間、先生にお願いして授業を受けさせてもらった。ブラパー先生には生物学を、タルワイティップ先生には植物学を教えてもらった。当時、先生たちは環境教育を充実させようといろいろ努力されていた。その中心になって活動されていたのが、今の T J クラブの会長のラッタワン先生。その手足となって動かれていたのがシリワット先生だった。先生たちは、学内や学外の学生たちのために多くの教育キャンプを実施されていた。そして、私も誘いを受けた。私が初めて参加したのは

カオヤイだった。その時、私はこの教育キャンプを手伝っていた何人かのプラナコーンの学生と知り合いになった。トゥットゥー、プイ、エーク、ボーイ、ノイなどがいたがトゥットゥーだけとは今でも連絡を取り合っている。その時、一人学外の人に来ていた。その人がシリポンさんで、当時 WWF タイランドの職員だった。このシリポンさんは自分でも別個に教育キャンプを企画していた。そして、そのキャンプを「緑の学校」と呼んでいた。ボランティアはほとんどがプラナコーンの学生だった。トゥムは空軍の兵士だったが、トゥムも仕事が終わってから、プラナコーンの社会人コースで学んでいた。初めて参加したプラナコーンのカオヤイでのキャンプで親しくなって、シリポンさんから次の「緑の学校」に招待された。

行ったところはチョンブリー県にあるバーンプラという大きな貯水池の畔にある禁猟区のキャンプ地だった。すぐ近くにはオオツルの繁殖ゲージがあった。今ではタイで見られなくなったこのツルを再び自然に返すために地道な努力がなされている。この時はバンコクの小学校から生徒が 30 人ほど来ていた。行きのバスでは、歌を歌ったり、ゲームをしたり、みんなとても楽しそうだった。私はこの企画はシリボンさんが勧めている保護基金が主催しているものだと思っていた。しかし、聞いてみると、独自で企画しているという。費用は会社巡りをしてスポンサーを募ったと言うし、たまには寺へ行ってものをわけてもらおうという。

初回、私は全くのお客様だったので、みんながプログラムに沿って活動しているなか、私一人は鳥を見てもいいということだった。私はその言葉に甘えて、キャンプ地の周りを歩き回った。夕方、私は鳥について話をするようになっていた。日本でもタイでも見られる鳥を選んで、その鳥の声をテープで聞かせ、簡単な説明を加えた。私の仕事はこれだけだった。そして、その時は一緒に宿泊せずにバンコクへ帰った。けれどこれを契機として、私はその後「緑の学校」と付き合うことになった。

その頃、「タイの鳥」が出版されて間がなかった。



タイでは少しずつバードウォッチングが一般に復旧しだした頃だった。この本はブーンソン博士が英人のフィリップ・ラウンド氏の協力のもと、二人のイラストレーター、カモン・コモルファリン、モンコン・ウォンカラシン両氏の協力を得て生まれたもので、それまでベン・キング等の「東南アジアの鳥」しか利用できなかったのに比べても便利になった。そして、プラナコーンの教育キャンプでも「緑の学校」でもバードウォッチングをプログラムに取り入れようとしていた。日本では時代遅れの私のカメラや 500 ミリの反射型望遠レンズ、録音機や集音機はここではまだ珍しい、高価なものだった。

プラナコーンでは学生を中心にバードクラブ設立の機運が盛り上がっていた。その時、私自身まだ日本野鳥の会・京都支部の会員だったので、昔よく一緒に苔寺の奥に鳥を見に行った井上さんに手紙を書いて、寄付のお願いをした。井上さんはいろいろよくしてくださって、支部から貴重なものをいただいた。いくつかの双眼鏡や寄付金で買った 3 本のニコンの新しい望遠鏡は学生にとって素晴らしい贈り物だった。これは京都支部からプラナコーンへの寄付ということになったので、学校側ではトン学長の出席で寄贈式が行われ、私が八木支部長の代理を務めた。

私は大学のキャンプにも、「緑の学校」にもよく行った。大学のキャンプではカンチャナブリー県のカオナムプやチャンタブリー県のカオソイダーオのキャンプは印象深かった。「緑の学校」では、私が参加した時はカオヤイへ一度行った以外、いつもバーンプラだった。泊まった次の日の朝は決まって鳥を見に行った。学生たちは新しい望遠鏡を先頭に、参加者を引率していた。キャンプでは、参加者はバードウォッチングの他、ゲームを楽しんだり、木の葉や枝を使って絵を描いたり、造形物を作ったり、森の中を散策したりした。ここには都会にないものがいっぱいあった。飯盒で米を炊き、キャンプファイヤーをし、テントに寝る。いつも帰るとき参加者は口をそろえて言った。「楽しかった。又、来たい。」「いろいろなことがわかった。」と。私もあるときは日本の島のことを話したり、新聞紙で兜を作って遊んだり、折鶴コンテストをしたこともあった。

あれは大学のキャンプでカオヤイに行った時のことだった。カオヤイにはよく行っているのに、何回目の時か覚えていないが、夕暮れ時、講師として来ていたシリボンさんが誘うので、二人でモーシントーのあたりへ行った。高台に腰を下ろすと、遠くで草を食んでいるシカの姿がたくさん見下ろせた。私たちはいろんなことを話した。シリボンさんは今の仕事に疑問を持っていた。上の人間は高い給料を取り、法人の金を使ってベンツを買い、自分の車のように乗りまわしている。シリボンさんは十分に仕事をしているのに、理解されず、それに見合う給料をもらっていない。その当方で、八千バーツぐらいしかもらっていないと言っていた。大学での公務員の初任給が六千バーツちょっとのころのことだ。彼はチュラ大を出て、一度職についてから、今の仕事に移った。そして、3 か月イギリスで研修を受けている。その時、もっと個人的な話もしてくれた。彼は仕事をやめて、「緑の学校」を生計が成り立つ程度に企業化しようと思っているらしかった。そして、彼にチャンスが巡ってきた。彼はそれが 5 分間のテレビ番組ではあったけれど、環境教育の進行役に選ばれた。毎回、あちこちの学校の生徒に自然のいろいろなことを体験させ、教える番組だった。そのころから、シリボンさんはプラナコーンに贈られた望遠

鏡を勝手に持ち出しているという苦情を聞くようになった。プラナコーンの先生もあまりいい感情を持っていないようだった。そして学生たちのグループも分裂してしまった。シリボンさんは大学のキャンプに来なくなった。一度、今持っている番組を買ってくれる日本企業はないかと尋ねられたこともあったが、私には心当たりがなかった。それから少ししてそのテレビ番組はなくなってしまった。トゥットゥーにシリボンさんのことを聞いたことがあった。シリボンさんはWWFタイランドも辞めてしまったということだった。しかしトゥットゥーはあまり話したがないのでこの話はそれきりになってしまった。

彼との思い出はいろいろある。中でも、カオヤイで大学生のための教育キャンプをしたとき、ハウスワット滝からカオレームへ行って、テントを張ったことがあった。食べ物が乏しく、ナムプリック・メンダーともち米しかなかった。最初何のナムプリックかわからなかったので何かと聞いてみると「メンダー」（たがめ）だと言う。そのとたんにもち米だけで済まそうと思った。翌朝、有志で探鳥に出かけた。そして、森の中で道に迷ってしまった。結局、三時間に及ぶ彷徨で元に戻ることが出来たが、私には忘れられぬ思い出になった。



12 月 2 日に、小菅村内において本会の運営委員会を開催しました。次年度の予定を検討しながら、（新）植物と人々の博物館の、書籍・標本・展示物の整理整頓を行いました。5 月にはお披露目の予定、それまでは準備中です～。

こんなこともありました



10 月 22～23 日かけて、台風 21 号が上陸。この時期の台風は、8 月と違って雨も水も冷たく感じます（写真は、木下養魚場のある山沢川）。

12 月 8 日現在。小菅村では、道路の凍結を気にしながら生活しています。

活動案内

『第 14 回 NPO 法人 自然文化誌研究会 通常総会』のご案内

2004 年に東京都の認証を受けてから、第 14 回目の総会を行います。正会員の皆様はぜひご出席ください。また出欠を同封のハガキでお知らせ下さい。このハガキは欠席の場合は委任状となっております。ご意見などもお気軽にお寄せください。なお、正会員以外の会員の皆様もオブザーバー参加が可能です。

日時：2018 年 2 月 18 日（日） 15:00 開始～16:30 終了予定

場所：小菅村 植物と人々の博物館（出席予定の方は事務局へお問い合わせください）

* 自家用車でお越しいただくか、JR 奥多摩駅から西東京バス「小菅行き」に乗り、「小菅村役場前」で下車。

* 詳細は事務局まで電話かメールにてお尋ね下さい。

議題： ①2017 年活動報告 ②2017 年収支報告 ③2018 年活動計画
④2018 年収支予算 ⑤その他 よろしく願いいたします。

正会員の皆さまには、出欠・委任状のハガキを送らせていただきました。
出欠席を、必ず事務局まで教えてくださいませ！！

その 1「冒険学校 まふゆのキャンプ」 12.26～28(2泊3日)

毎年恒例の冒険学校「まふゆのキャンプ」を体験して、暖かいお正月を迎えませんか？

小菅村ではお正月の準備がもうはじまる頃です。日中は、村内を自由に動き、村の中でもちょっと面白いところに行きましょう。焚火・薪割り・ナイトハイク・星空観察・バードウォッチング・アウトドア料理・滝探検・・・その場で思いつく限り、いっぱい遊んで、食べて、寝る。そんなキャンプです。個性あふれるスタッフがみなさんの参加を待ってます。常に火とともに生活する 2 泊 3 日です！！

日 程：12 月 26 日（火）～28 日（木）

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テントまたは野宿またはログハウス

対 象：小学校 3 年生～中学校 3 年生

定 員：20 名先着順です。

参加費：会員 ¥22,000 非会員 ¥24,000

（奥多摩駅からの交通費・食費・宿泊費・保険代などが含む）

申込み：ハガキ・もしくは E-mail に住所・氏名・年齢（学年）・性別・電話番号を記入の上、すぐに事務局まで参加をお伝えください。まだ間に合います！！



この事業は 2017 年度 国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けて開催します。

『藤農便り』 第 11 号

宮本茶園 宮本 透（自然文化誌研究会）

1 月に新規就農してからあっという間の 1 年が過ぎました。今年の秋は雨が多く、晴耕雨作の日々でした。晴れの日には富士山を眺めながら茶畑で黙々と作業し、雨の日には家でまったりと YouTube 鑑賞です。今期秋アニメは学園物に秀作があり、一押しは「Just Because!」。湘南に住む高校生たちの友情や恋愛を描いたアニメで、藤沢駅周辺や善行の田園地帯など懐かしい舞台風景を頭の中で聖地巡礼しながら楽しんでいきます。続いては「アニメガタリズ」、入学した高校のアニメ研究部を復活させるために個性豊かな部員を集め、生徒会の廃部攻撃を乗り越え部活動に取り組む 1 年生の物語です。彼らの学園生活は新入生が入らず廃部危機に悩みながら部室で過ごした探検部の思い出と妙に重なり合い、感情移入しながら応援しています。

・旧交を暖める

10 月下旬は懐かしい人たちと旧交を暖めました。今なお私と付き合いにくさる友人たちに感謝です。10 月 21 日、中学校の同窓会に参加するため藤沢に帰りました。迎えてくれたのは竹馬の友のジュンリ君。彼は母方の遠戚にあたり、クラスが一緒になってからはいつもつるんで遊んでいました。母の旧姓は三嘴、藤沢市羽鳥の旧家で「明治時代初期に耕余塾という私塾を開設、神奈川県屈指の中等教育機関で総理大臣吉田茂や味の素創設者鈴木三郎助などが学んだ」と歴史書に記されています。一族には教員が多く、私も中学生の頃はご先祖様のような立派な先生になりたいと思っていました。こんな家系で育てられた 2 人は道を踏み外し、互いに親が嘆き悲しむ人生を歩んでしまいました。藤沢駅でゼンマスター・臨済宗老師のイノケン君と待ち合わせ、江ノ電に乗って会場の鎌倉プリンスホテルに向かいました。ヤクザのジュンリ・僧侶のイノケン・ホームレス然の私は目立った存在で、「お前ら相変わらず破天荒な格好しているな!」「発達障害 3 人組!」とからかわれました。母校の藤沢市立明

治中学校は校歌に「太平洋から吹く潮風を胸にいっぱい朝夕吸って」とあり、幹事団は還暦記念の同窓会会場に太平洋を見渡せる鎌倉プリンスホテルを選んだそうです。台風接近で大波の海原を背に旧友たちと肩を組み校歌斉唱した事は大切な思い出になりました。

27 日は学大特殊教育科先輩の北村小夜さんが訪ねてくれました。「障害児を普通学校へ・全国連絡会」世話人の北村さんはクラス仲間と取り組んだ特殊教育研究部の養護学校義務化阻止闘争からお付き合いが始まりました。私が教育労働者になってからは日教組の先輩となり「日の丸・君が代」強制反対を共に闘い、神奈川県教委から受けた「日の丸」処分撤回裁判には横浜地裁へ毎回傍聴に駆けつけてくださいました。てくてくてランチ、駅前の雑穀畑・和田と上岩の茶畑・八木の竹林・内郷の大豆畑を案内、お別れする時はすっかり日が暮れていました。手作りの着せ替え人形をお土産にいただき児童クラブの子どもたちは大喜び、優しい素敵な先輩です。

28 日は成合会、柴田君の呼びかけでいつもの仲間が集まりました。中込君と横山さんは来る 3 月に定年退職、老後人生の話題で盛り上がりしました。1984 年から途切れることなく続く探検部の同窓会、大切にしたいものです。

・秋の茶仕事

夏の間ひたすら草取りに汗を流した茶畑、9 月になって秋肥を施しました。鶏フン・油カス・苦土石灰を合計 1 t 半、3 週間にわたり袋を担いで急斜面を登り畝間にまきました。施肥が終わると中耕、さらに 3 週間アグリズで購入した手打ちの 3 本グワで 5 反の茶畑を耕し続けました。冬に敷いた竹チップやカヤはフカフカな土になり、ところどころにキノコが生えています。まさに土は生き物だと実感できました。10 月中旬からは長雨と台風に悩まされながら整枝作業を行いました。藤野に移住し茶栽培に取り組んで 3 回目の秋整枝、「石の上にも三年」を実感、作業にだ

いぶ慣れてきました。

10 月 19 日は第 2 回藤野茶業部会議、25 日は整枝剪定講習・茶園巡回指導がありました。部会で品評会結果が報告され、煎茶加工でお世話になった高梨茶園は 194 点の 5 位、私は 156 点でした。巡回指導で第 50 回神奈川県茶園共進会の出品茶園に上岩の畑を選んでいただきました。



(共進会出品茶園)

茶業部の先輩方からクワで中耕した事を「根性あるな」とほめていただき嬉しくなりました。

11 月 13 日、山北町にある神奈川県農協茶業センターの視察研修会がありました。2010 年 3 月に吉田島農林高校を異動になって以来の足柄訪問、茶業センターには教え子が勤めていて久しぶりの再会に感激しました。茶業センターを後にして山北・松田の茶園視察、きれいに手入れされた足柄の茶園はお手本にしたいと強く感じ入りました。



(山北町茶園視察)

松田町寄地区の市民がかかわる茶園管理は佐野川のモデルになり得るもので興味を持ちまし

た。

煎茶は古い友人を訪ねて行商、さらに日連のてくてく・篠原の里カフェ・三ヶ木のまあさの家・西原のびりゅう館で扱っていただいています。11 月は観光協会の藤野観光まつりとシュタイナー学園の藤野まるまるマルシェに参加し、試飲販売いたしました。イベントの対面販売でお客様と会話して気付いた事は、藤野が足柄茶産地だと知らない方が意外に多いことです。来年は栽培とともに普及活動にも微力ながら尽くそうと思います。

・津久井在来大豆収穫

6 月に播種した津久井在来大豆は順調に生育し、9 月末にエダマメを収穫。もぎたてのエダマメを塩ゆでして食することは栽培者の特権で、市販のエダマメでは味わうことができない濃厚なおいしさを堪能しました。10 月半ばには硬くなり、賞味期間は 1 週間から 10 日程のようです。

内郷の畑は 11 月 12 日に刈り入れました。草子農園サポーター総動員の作業、役割分担して刈り払い機で茎を切りビニールシートの上に並べ乾燥させていきます。



(大豆刈り入れ)

茶色に完熟したサヤはパンパンと音を立てはじけるものがあり、青いビニールシートに白い豆が転がります。青・白・茶の絶妙な色の対比を楽しみました。天日で乾燥させた大豆は 11 月 25 日に脱穀、みんなで茎を運び農協から借りた脱粒機にかけましたが半日がかりの仕事になりました。



(大豆の脱穀)

積み上げられた大豆殻は、翌日 3 回に分けて上岩に運び茶畑に敷きました。半年間お手伝いした大豆栽培も無事終了、来年は雑穀街道の活動と絡めて藤野で取り組みたいと思います。

・ミレット 藤野雑穀栽培講座

昨年アワ・ヒエ・シコクビエはスズメの餌場と化しモロコシ・ハトムギしか収穫できなかったのが、今年は早めに防鳥ネットを張り巡らしましたが、またしてもスズメの襲撃を防げずキビの穂は丸坊主にされてしまいました。夏秋は天候不順でしたが他の雑穀は元気に育ち、9 月 24 日の第 4 回講座で収穫することができました。

10 月の収穫作業は雨天中止、11 月 19 日の第 5 回講座は西原で実施しました。午前中は中川さんの指導で雑穀の穂を木槌でたたいて脱穀しました。

。



(雑穀脱穀)

唐箕の扱い方を習い納屋にあるたくさんの雑

穀を見学し、参加者は有意義な時間を過ごしました。びりゅう館に移動して水車見学、昼食は特注雑穀ランチです。増田先生の講義の後は雑穀の村復活プロジェクトメンバーと第 2 回雑穀街道交流会を行い、西原の活動報告を聞き、今後の活動へ向け意見交換しました。



(第 2 回雑穀街道交流会)

12 月 3 日の第 6 回講座は越野さんの雑穀料理教室・試食会でした。ヒエの具沢山スープ・ヒエのフィッシュフライ風・ウルチアワと野菜の炒め物・モチアワとサトイモの酒粕グラタン・モチアワとリンゴの薪ストーブ焼き、駅前畑で収穫し西原で脱穀した雑穀を使った贅沢な料理です。



(雑穀料理教室)

「モタレナイけれど腹持ちよい、夕飯は軽めにしました」との感想もあり好評でした。ミレット 藤野雑穀栽培講座は無事終了、折しも 11 月 27 日付毎日新聞神奈川版に「雑穀街道 世界遺産目指し」の記事が掲載され、来年も藤野で雑穀栽培を担う決意です。

『INCH の楽しい仲間たち』 vol. 7 その 13

『冒険探検粉塵記 第 13 話 のように生きなくなった日本人』

駄作者 文福洞先斗

V.W.ファン・ゴッホ（1888）は親愛な弟テオへの手紙に、ある日本人たちのことを次のように書いてくれた。「かくも単純で、あたかも己れ自身が花であるかのごとく自然のなかに生きているこれらの日本人がわれわれに教えてくれることこそもうほとんど新しい宗教ではあるまいか。もっと大いに陽気になり、もっと幸福になり、因習の世界での我々の教育や仕事に逆らって自分たちを自然へと立ち返らせることをせずに、日本の芸術を研究することはできないように思われる。」

妖怪人間ベムは「早く人間になりたい」と言う。「ある実験により 1 つの細胞が分裂して生まれた、三人の“妖怪人間”ベム・ベラ・ベロ。彼等は、人間に勝るとも劣らぬ優しい心を持っているにも関わらず、その醜い容姿ゆえに人間から迫害され続け、人間になる方法を探し求め数十年間に渡って街から街へとさすらい続けてきた（ウィキペディア 2017）。」彼らもきっと阿修羅なのだ。阿修羅とは古代インドの神の一族、後にはインドラ神に戦いを挑む悪神とされる。仏教でも天竜八部衆の一として仏法の守護神（8 種の異類）としながら、六道の一として人間以下の存在とされる。六道とは、衆生が善悪の業によっておもむき住む六つの迷界、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道のことである（広辞苑）。長野善光寺に 6 菩薩像があり、それぞれの道の衆生を救おうとされている。

ポンちゃんはもう一つの阿修羅として生きると意思した（木俣 2005）。この時のエッセイを要約する。ひろさちや（2005）が『わたしの中の阿修羅』で、傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に「汝、諦めるべし」と言い、ジョージ秋山（1970）の『アシュラ』、萩尾望都（1995）の『百億の昼と千億の夜』の阿修羅、新美南吉（1992）の『ごん狐』は阿修羅の想いを描き、さらに、宮沢賢治（1923）は『春と修羅』で「お

れはひとりの修羅なのだ」と詠っている。山の神の使いである門男になりたいポンちゃんも阿修羅なのだ。

このくにの人間はゴッホが想ったように花のように美しいのかを問いたい。彼らが「人間道」にいても、実は（餓鬼道や地獄道にいて）人間の振りをした野獣か、野獣の皮を被った似非人間であり、その心性があまりにも醜いのなら、私は阿修羅のように、美しい人間になるため、解脱に向かって修羅道を生きたい。心を開いて孤独を求めず、勇気を励まして孤立を恐れないようにしたい。このために、今、解いておきたいこのくにの 3 つの謎がある（黍稷農季人 2018）。

第一の謎、何故に現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。過剰な都市の便利に幻惑わされて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。自然や先祖とのお付き合いを失ったら、文化的に、精神に変調をきたすだろう。先人の自然を基層とする文化は山村に何とか今でも残っている。ここから、都市民は自然との付き合い方、祖先の生き方を学ばなければならない。山村には伝統的知識と技能を伝える現代的な仕事、職業が希求されるのだ。

第二の謎、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。お付き合いしている方々はとても親切なのに、私費でかつ任意の労力も地域社会に提供しているのに、さらに経済効果も高いのに、大いに地域に貢献しているのに、何故に有耶無耶の不情理によって追放されるのか不思議で仕方がない。浅い付き合いまでは為政者が利用できるのが都合も良いが、恐らく、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたのが為政者に解釈されると、彼らの領分を侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥

知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。それで排除されても、もうポンちゃんは山村から逃げ出さない。

第三の謎、何故に地域社会を守るために働いた人々を、地域社会は黙殺してきたのか。明治維新の功罪のなかに隠蔽された「重罪」である。明治の半ばには大方の抵抗は鎮圧された。自由民権の徹底した弾圧（治安維持法）が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。足尾銅山鉱毒事件や水俣水銀公害などもみな同じように、常民・市民を守るべき為政者に隠され、抑え込まれてきた。これが不実虚偽と事実隠蔽の歴史ではないのか。王侯貴族の金銀財宝、権力の歴史だけではなく、常民・市民は自らの生業や抵抗の歴史を学び、忘れないことによって、自由、平等、友愛を広げてきた先人の努力を感謝・尊敬すべきだ。現在、我々がとらわれている因習とは、過剰な商品経済に踊らされ、流行に溺れ孤立し、虚無を一層深めていることである。都市文明の過剰な便利に収斂すれば、人間は最終的な心の源郷、避難場所さえも失う。その自然や山村にすら、人生を楽しく暮らす場が無くなる。今、ポンちゃんの冒険行動は、統合へと向かってきた人間の心の構造が

過剰な科学技術の便利により、また情報機器に依存して、知能の分断へと退行する危機に抗う進化史の探求にある。

「独立自尊」は小菅小学校の校訓である。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心を、咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。

湯川洋司（1991、1997）は全国の山村を訪ね歩いた民俗学者だ。彼は、山のむららしさを損なわずに自律的な暮らしの設計が可能になる道を模索することが大切であり、食料を自給する一方、木材を活用しつつ茶・椎茸・楮・三桠などの山の産物を商品化して自律的生活を打ち立てるのが良い、と述べている。ポンちゃんは彼と同じようにユーラシアの山村を訪ねてきたので、彼の温かい想いにはまったく共感する。上野原市西原地区の降矢静夫老師はもとより、丹波山村の岡部良雄さん、小菅村の守屋秋子さん、西原地区の中川智さん始め、敬愛する山民に習って、自律して生業を楽しみ、暮らしていこうと思う。



長野善光寺の六菩薩像



中川さん宅での雑穀脱穀作業。



西原地区の景観。40 年以上見てきたが、里山は変わらない。

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.8 その1

※世界地図を用意し
て読むと、移動距離
がわかるよ!!

スコットランドヘウヰスキーを飲みに

佐伯 順弘（岐阜県）

先日の INCH まつりのときに、黒澤くんから、「スコットランド旅行で原稿書いてみませんか。」とありがたい言葉をいただいた。折角なので、書かせていただくことにした。スコットランドには 2012 年の 8 月と 12 月、2016 年の 8 月、2017 年の 8 月の 4 回訪れている。ウィスキー蒸留所訪問が主な目的であったのだが、その他にも心魅かれるものが多くあり、すっかりかぶれてしまった。今回は 2012 年、初めてのスコットランド訪問について書こうと思う。

冒険探検部時代に書いていた文章とそれほどかわらないぐだぐだとした旅の記録である。お気に入りの酒でも飲みながら、ゆるく読んでいただけたら、幸い。

2012 年は、台湾の高雄日本人学校に赴任していた。そして、2012 年と言えば、ロンドンオリンピックである。そして、ロンドンと言えば、イギリス、イギリスと言えば、スコットランド、スコットランドと言えば、スコッチウィスキーである。さらに、この日本人学校には夏の部活などない。会議などもない。そういう訳で、今までの部活漬けの身には信じられないほどの時間がある。私は、長年の野望であったスコッチウィスキー蒸留所を訪ねる時が来たのを悟っていた。これがその後のイギリスかぶれ及び、蒸留所巡りにハマるきっかけだったことをその時はまだ自覚せずにはいた。

航空券は知り合いの旅行社に頼んで、4 月 30 日に確保（高雄→香港→ロンドン）。ロンドンからはネットで航空券（ロンドン→グラスゴー、グラスゴー→アイラ）を取った。目指すはスコッチウィスキーの中でもひととき強い個性を放つアイラモルトの聖地、アイラ島である。

DAY1～2

さて、旅行当日。私の旅はかなり高い確率で様々なトラブルが起きるのだが、今回は最初から来た。8 月 2 日 11:25 高雄発香港行きのフライ

トが台風のためにキャンセルになったのである。いやあ、さすが台湾。台風直撃が普通のことであり、台風の影響で一般企業まで休みになるくらい国だから、別に不思議ではない。何とか 20:30 高雄発、24:35 香港発に乗れることになった。格安航空券でも台風のために飛べないという理由なら、変更くらいしてくれるのだ。しかし、そこから先が問題である。さすがに 12 時間以上の遅れは想定していなかったもので、乗継の次のフライトには間に合わなくなった。別の航空会社なので、台風による遅れは当然関知してくれない。何とか、ネットで取り直しを試みる。1 つの航空券はできた。もう 1 つは空港の公衆電話から、時間も関係なくイギリスまで電話をかけ、ありったけの英語力を駆使して、何とか確保した。まだ、出発もしていないのに、旅の日程をかなり消化した気分だった。いつものことなので、どうということはない。むしろ定番のイベントだとさえ感じる。もう少し英語力をつけたいと今頃思うのも毎度のことで情けないのだが。

そうこうしているうちに、台風通過に伴い、その影響も収まったところで、やっと高雄を出発した。香港で深夜の乗継。そして、ロンドンヒースロー空港に到着したのは、朝 6:00 頃。

寒い！いくら早朝だといっても夏である。この寒さは驚きだ。フライトの乗継まで時間がある。機内で食べたと言っても、やはり現地で現地のを食べないと到着した気にならないので、カフェで少し休む。今日のうちに、二回のフライトをこなしてアイラ島に行くのだ。休めるときに休んでおくのは作戦行動の基本である。14:30 グラスゴー行き、16:40 アイラ島行を乗継いで、やっとの思いでアイラ国際空港に到着。実に 2 日目の 18:00 頃のことである。

さて、とりあえず空港施設の外に出て状況を見ることがにした。そこにあったのはバス停と 1 台のタクシー。そして、もう一人の旅行者。「シェア

する？」とその旅行者は言ったと思う。「ありがとう、もちろんだ。」と答えたと思う。もう、一瞬の出来事で、タクシーは走り出していた。自分でも驚くくらいの瞬発力だ。一緒に乗った旅行者とは少し挨拶をしたくらいで、特に話も弾まなかったが美しい女性だった。彼女の方が遠くまでいくとのことで、持っている小銭すべて（1000 円分くらい）を渡して車を降りた。

やっと宿泊する街、ポートエレンに着いた。

White hart hotel は入り江を望む静かなホテルである。本当に時々通る車のかすかな音の他は、カモメの鳴き声と波の音しかない。部屋も落ち着いていて、気分がいい。夕食までまだ時間があるようだ。少し街を歩く。ここは入り江に沿ってできた小さな街である。冷えた風からは微かに潮の香りがする。売店、ホテル、レストラン、CO-OP、港、砂浜。そして、潮の香りに時折交じっているのは、まぎれもなくピートの匂い。ピートを実際焚いたことはないが、アイラモルトにつながるこの香りを間違えうわけはない。アイラ島にやってきたのだという実感がふつふつと湧いてくる。さて、腹も減ったところで夕飯でも食べるかとホテルに戻り、レストランに行ってみて驚いた。場違いなほど高級感あふれるところだったのだ。カメラを出すことも憚られるくらいだった。

ブルーチーズやクルミがはいったサラダ、チキンのベーコン巻にどっさりのフライドポテト。うまさと量に満足。エールビールのうまさにも驚いた。2PINT 飲む。（1PINT は 0.568L である。）アイラ島最初のウィスキーは蒸留所で飲もうと思っていたので、その日はおとなしく波の音を聞きながら寝る。

DAY3

朝食をとる部屋は昨夜のレストランとは別の部屋だった。しかし、ここも美しくテーブルがセットされ、なかなか気分の良いところだ。海も見える。さて、オーダーして運ばれてきたのは大型の皿だった。これが噂のイングリッシュブレックファーストか。いや、ここはスコットランドだから、スコティッシュブレックファーストというべきか。（後で調べたら、そのとおりだった。）夕食もそうだったが、朝食もうまい。誰だ、イギリスのメシがまずいなどといった輩は。ここではっき

りさせておきたい。イギリスのメシはうまい。これは真理である。

朝食後、やや食べ過ぎの腹を抱えながら、探索に出かける。目指すは LAPHROAIG である。アイラモルトにハマるきっかけとなったスコッチであり、ヨードを思わせる強い香りによって好き嫌いが大きく分かれるといわれるアイラモルトを代表するウィスキーの 1 つである。地図でどこにあるかはわかっていた。多めの雲とその間から射す強い光。海風が気持ち良い。やや肌寒いが、日が射せばかなり暖くなる。アザミなど豊富な草花が辺りに広がっている道をたらたら歩く。この街の交通についての理解が進んでいなかったため、徒歩で向かったが、ゆっくり歩いて約 40 分で到着してしまった。



初めての蒸留所。ビジターセンターに入るも、蒸留所見学ツアーは少し前に出発。更に、「説明してもらっても、どうせ理解できないし・・・。」という気後れから、外のベンチでのんびり過ごす。しばらく、休んだ後、LAGAVULIN へ向かう。やはり、徒歩である。実は宿泊している街、ポートエレンから東の方面の道沿いに 3 つの蒸留所がある。何とか歩いて行ける距離に並んでいるのだ。（数年後、その小道を Three Distilleries Path というのだと知る。）



LAGAVULIN には約 20 分で到着。都合の良い時間に見学ツアーがあったため、先ほどの気後れも忘れて参加。製造の過程などはほぼ理解していたため、説明もなんとか聞き取ることができて、満足。冬だったら更に気分がよいであろう暖炉のあるラウンジでテイスティング。至福の時を過ごす。もう 1 つの蒸留所 ARDBEG は次に回すとして、帰途に就いたが、再び LAPHLOAIG を通過したとき、やはり、一番気に入っているアイラモルトなら行っておくべきであろうと考え直し、ツアーに参加する。ツアーは先ほどのツアー参加の経験から、より理解しやすかった。



(ラフロイグのポットスチル)

最後は、LAPHLOAIG の歴史が展示された博物館のようなラウンジの一角でテイスティング。これまた、至福の時。少子に乗って、会員の入会申し込みをしてしまった。特に、会費が必要なわけではなく、それどころか敷地内に土地をもらうことになった。とはいっても、両足を揃えて立つくらいのものでしかない。



(世界中の人々が土地を所有するエリア)

それでも所有は所有。そして、LAPHLOAIG に貸すという形で、貸し賃をもらうことになる。それが、グラス一杯のウィスキーとくるからたまらない。そりゃまた、訪れたくもなるというものだ。「自分の土地に旗を立てておいてね。」ということなので、用意されていた日の丸をその土地に立てた。諸外国に混ざって、日本の国旗が用意されていたことがうれしかった。

さて、LAPHLOAIG を後にして、大満足でホテルへの道を歩く。イギリスは一日の中に四季があると言われるほど天候が変わりやすく、当然気温も大きく変化する。途中、そこそこの雨に降られたものの、想定内であったため雨を楽しんで歩く。途中で、ショップに立ち寄り、水、牛乳、ポテチ、パスタサラダを買い、夕食として食べる。昨日の 6 分の 1 の出費で済む。どこまでの貧乏性である。

その日は疲れていたせいもあり、早い時刻に寝てしまった。

DAY4

誕生日を迎える。いつからか旅先で誕生日を迎えることが多くなった。数年は 1 人、山で誕生日を迎え、1 つ成長して帰るというようなことを思っていた時期もあった。

さて、今回の蒸留所訪問は 2 つということにして、この日は街の探索をすることにした。ハガキと切手を買った他はずっと歩き続けた。やはり歩くのが好きだ。立ち止まって石を拾ったり、地層から大地の変化を考察したり、人々の暮らしを見たりするのはとても楽しい。その日の昼食は街で一番高そうなホテルのレストランを選んだ。日曜日ということで、サンデーローストの日だった。この日は父親がローストビーフを作って、家族で食べる日なんだそうだ。ということで、エビのスープ、ローストビーフをオーダー。ローストビーフもおいしかったが、エビのスープがこれまた絶品であった。エビのワタを使っているのだと思われるが、素晴らしい味だった。再び、未だにイギリスのメシはまずいと思っている人々に認識を改めるよう訴えたいと痛切に思った。昼食に満足し、ホテルに戻るとしばらく惰眠をむざぼった。16 時頃、ホテルのラウンジでビール。ほろ酔いで、散歩に出かける。ホテル前の海辺はいつ

も気持ちの良い風が吹いている。波の音とカモメの鳴き声だけが聞こえ、他の余分な音が入ってこない。最初にこの街に来たときに感じた微かなピートの香りも穏やかな風に交じってくる。

アイラの風を十分堪能した後、再び先ほどのラウンジに戻り、ハドックのフライ（フライドフィッシュ）、エールビール2PINT、そして、今回行けなかった ARDBEG 1 ショットを楽しむ。とにかく、うまい。くどいようだが、イギリスのメシは・・・。



（ほとんどのメニューにポテトがつく）



夕食後も少し街をうろついた。なかなか日は暮れない。どんよりとした空。冷えた風。人通りがほとんどない街。もちろん、いないわけではない。パブは酔っぱらいでいっぱいである。

さすがに、一日中歩き回って疲れていた。シャワーを浴びて早々に寝る。

DAY5

今日は朝の便でアイラ島を後にする。いつものスコティッシュブレックファーストをいただき、チェックアウトすると、バス停でバスを待った。本

当に来るのか？一度も試していないのに、絶対に遅れたくない空港への足にバスを選ぶとは、毎度のことながら、敢えてリスクを盛る旅行である。果たして、無事バスは到着し、一度も赤信号にひっかかることなく（信号自体がなかったような・・・）、バスはアイラ国際空港に到着した。滞りなく、チェックイン、セキュリティチェックを終え、グラスゴーへと飛び。



さよならアイラ島。また来るぜ。必ず、またくるからな。待ってなくても来るからな。と、一人、アイラの大地に誓うのであった。

それにしても、プロペラ機はなんか頑張って飛んでいる感じがいい。1+2列の座席、しかもリクライニングが効かないシート。これがまた楽しい。そんな楽しい時間もあっという間に過ぎ、40分ほどで、グラスゴーに到着。

とりあえず、6日間。実質3日ほどのアイラ島の旅は終わりをつげたのである。

その後、グラスゴーからロンドンへ飛び、鉄道でロンドン中心部へむかった。

ロンドンのセント・パンクラス駅ちかくにある Generator hostel にチェックイン。Generator はその後ロンドンでの定宿となっていくのだが、夜中～朝方にクラブ帰りであろう若者がへべれけで帰ってくるところが退廃的でいかにもステレオタイプなロンドンのイメージそのものである。

既に、旅の第2章に突入している。これから、今回の2週間の旅はもう一つのイベント、ロンドンオリンピック観戦へと続いていくのであるが、その話はまた別の機会にするかもしれないし、しないかもしれない。（つづく）

○ 今後の活動予定のお知らせ (2017 年 冬～2018 年春)

- 12/26-28 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2泊3日
 2/18 NPO 法人自然文化誌研究会 『第14回通常総会』 @小菅村
 4/29 『のびと講座 野草の天ぷらとお茶つみの会』 @東京学芸大学環境教育研究センター
 5/3-5/5 『冒険学校 むらまつりキャンプ』 @小菅村 2泊3日

※ ログハウスづくり第4弾の「トイレ棟づくり」スタートしてます！興味ある方は、メーリングリストに登録しますので、事務局までご一報ください！！

○ 事務局より

●『『雑用』って仕事は、実は最前線の現場にいるからこそ発生する仕事である』っていうのを本で読んで素直に受け止めた瞬間、これまで以上に事務局の仕事がしやすい心になりました。んー、単純っていいなあ。 クロ

○ 事務局の麗しき日々

- ・ごみさん、緑さん、定年まであと三か月！！
- ・のんちゃんはいよいよ就職が決まったもよう。やったね！！
- ・一方、せいじゅくんは決まらずに年明けが確定したもよう・・・。
- ・そして何の不安もなく、可能性に満ちているとのこと・・・。
- ・ナマステを編集集中の本日！！ 大ちゃんは拳式のもよう(11/18)
- ・まーしーから来夏の冒険学校のプログラム案が届いているもよう。
- ・みなえちゃんが「散歩が楽しくなる 樹の手帳」を著しました！
- ・翔くんの説法「はるちゃん、バイク乗らないなら免許を返納しなよ」
- ・この夏、雫さんの説法が若者スタッフの間でブームになったもよう
- ・甲斐が・・・、へえ、そうか、うむ、良かった。めでたい。

○ 会員の皆様へサービスのお知らせ

神奈川県相模原市藤野町にある『藤野倶楽部』は今年も INCH 賛助会員です。INCH 会員への特典として、ナマステ今号を持参された方には「百笑の台所」の食事料金を 10%割引いたします。アクセスは藤野倶楽部の HP をご覧ください！！

○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称 INCH (インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、30 年以上にわたって活動を続けています。2004 年から NPO として再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下 8 つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額(1～12 月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000 円 一般会員：5,000 円

学生会員：3,000 円 賛助会員(個人・団体)：10,000 円

家族会員：6,000 円 特別維持会員：100,000 円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000 円

小菅村特別会員：1 口 1,000 円から

成合基金(冒険探検基金)：「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 130 号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2017 年 12 月 10 日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行>特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL：0428-87-0165・090-3334-5328 (事務局黒澤)

E-mail：npo-inch@wine.plala.or.jp

H P：http://www2.plala.or.jp/npo-inch/

事務局ブログ：http://npoinch.naturum.ne.jp/ (あんまり)